

この人に 聞く

新潟大学人文学部人文学科教授

鈴木光太郎氏



インタビュー
二瀬由理

Profile — すずき こうたろう

1954年、宮城県生まれ。千葉大学人文学部を卒業後、1985年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。1985年に新潟大学人文学部助手となり、助教授を経て、1999年より同大学人文学部教授。専門は実験心理学。主な著書は、『人文学の生まれるところ』（分担執筆、東北大学出版会）、『オオカミ少女はいなかった』（単著、新曜社）など。



— 先生の最近の研究テーマは？

これまで「月の錯視」の研究を続けてきましたが、いま新たな実験を準備中です。動物の認知の実験もしていましたが、教育や研究以外の大学の仕事が忙しくなって、いまは開店休業中です。ただ、翻訳の仕事は結構たくさんやっています。翻訳は、5分とか10分の空き時間を使って細切れでやる仕事ですので、いろいろなことで忙しいと、自ずと翻訳が多くなってしまいます。

— 先生はこれまで15冊ほど翻訳なさっていますね。翻訳の仕事は楽しいですか？

翻訳はオリジナルなことをやっているわけではないので、心理学では業績として評価されることはありません。それなのに、どうして翻訳をするのか。翻訳の醍醐味は、著者の立場や視点に立ってものを考えることができることにあります。また、著者に直接コンタクトをとることもできます。わからないことがある場合は、どうしても著者本人に質問する必要が生じます。ビッグネームの先生に直接尋ねたり、意見を言ったりすることは、通常はなかなかできません。ところが、翻訳という仕事を通すと、それができます。一種の対話ができるのです。とはいっても、翻訳の仕事はよいことばかりではありません。たえず誤訳や誤読の危険と隣り合わせですし、時間とお金もかかります。1冊の本を翻訳するために最低でも50冊

程度の本を買い込んで、目を通さなくてはなりません。

— 先生が書かれた『オオカミ少女はいなかった』という本を読みました。この本では、心理学でこれまで真実だと信じられていたことについて疑いを投げかけられているのですが、このような視点はどこから生まれてきたのですか？

20年ほど前には、私もオオカミ少女の話やCMのサブリミナル実験の話を教養の授業でしていました。しかし、話しているうちに自分で「なにか変だな」と思ったり、学生から「これは本当にあったことなのか？」「ここはおかしいのではないか？」といった質問が来たりして、多少重い腰をあげて調べはじめたのです。すると、いろいろなことがわかってきました。それから長い時間をかけて、疑いが徐々に確信へと変わってゆきました。この本は今年の3月に『おそろしい心理学』というタイトルで、韓国で翻訳されました。韓国語版では、日本語版とは構成が異なっていて、第1章が「まぼろしのサブリミナル」、最後の章が「オオカミ少女はいなかった」になっています。韓国の方々の関心の重みづけに応じて章立てが工夫されています。いま韓国では心理学がかなりのブームで、日本以上に、心理学書が山のように出版されています。そのなかの1冊です。評判はよいようです。

— 先生はなぜ心理学を勉強しようと思われたのですか？

大学に入って、最初は3年ほどフランス文学を学んでいました。しかし、教養の授業で「心理学」の講義を聞いて、このようなおもしろい学問があるのと感じました。それまで心理学というのは、フロイトやユングなどの深層心理学が中心だと思っていましたから、自然科学としての心理学はほんとうに新鮮だったのです。その頃から、フランス文学をやりながら、心理学の授業やゼミに積極的に参加しはじめて、結局最初の大学を中退し、実験心理学を学ぶために、当時実験心理学では優れた研究者を送り出していた千葉大学に1年から入り直しました。

— 最後に少し哲学的な質問になりますが、先生にとって心理学とはどのようなものですか？

私にとって、心理学は建築現場の足場のようなものですね。心理学を土台にして、文化人類学、先史考古学、生物学、物理学などさまざまな学問を勉強する機会を得ました。心理学を知らなければ、このような学問に触れることもなかったかもしれません。心理学を通して世界が広がりました。フランス文学をやり続けなくてほんとうによかったと思っています。

にのせ ゆり
新潟国際情報大学
情報文化学部情報
システム学科准教授。
専門は実験心理学、
認知心理学。

